比翼連理花廼志満臺初編巻之下

江戸　松亭金水編次

第五回　處女の悲歎

天をも量るべし地をも測るべし。されど計るべからざるハ人の心といひけんも理なるかな縁談の定まるハたちまち慾心に眼くらみて元来の盲目を照しつゝ小六に辞その難題のごとく設けし無造作ゆゑ完爾と懐へおさめおきけるハ芝居見んと。[illegible]人手[illegible]の家路その名も[illegible]浮寝まどろむとハ見てけがらハしく悪党面[illegible]来かゝる

きり「おらァもゝ。お吉（きち）さん見（み）そけくださることより　治へ「コレサお吉（きち）が。志ねらふ空

とお清（せい）さんへ　吉へ「オヤおまへさんとぞんじ、どう旦那（だんな）どもへ　治へ「旦那（だんな）より

マア／お内儀（かみ）さんが何（なに）か多流（つまみ）る打粉（いだき）で。何処（どこ）へ参（まゐ）りまに出（で）かける。其（それ）をそうと

コレお吉（きち）。いろ／＼ぎやからしく頼（たの）んでおく。お相手（あひて）のるいをさとしてくださる

あんな悋気（りんき）な女（をんな）でも。今（もう）まり勿体（もつたい）がつけまするが下さんすれてお吉（きち）へ

はずいと　吉へ「おいら三（モウ）やまやどまで。おまへさんは談合（さうだん）で。誠（まこと）の面（めん）

目（づく）がとぞんへはすまへんヨ。何（なに）が中々もアノ豊（とよ）りまで弦のふる雑言（ぞうごん）と

申しまする。なぜがりの申し兼ねまするとまゝの手せんの子　治へ「イヤサ　申し兼ねぢき

ところの人。詩んでから二ヶ月（ふたつき）あまり。それぢやアきれいで手素知ん

（こ）ませんかな　表「イヱ〳〵おかみさんなんぞハお客（きやく）の世話（せわ）でも。まだお前様（まへさま）がたり

中ませぬアるね。十二あなた人さんの御門（ごもん）からよく顔（かほ）つそ。あの（おの）いつもおかげさまで

すんから　孫「そんならどうかちつとは内心（きま）する　表「それハ御本懐（ごほんくわい）でござへ

ませんか。二三日（ふつかみつか）のうちにあがりまして是非（ぜひ）ともおぶろ拝借（はいしやく）ねがひませう

孫「ずいぶん働（はたらき）のよくなるところ。そのうちありがたふへ。まづ為替（ぜにのこと）ひま

何処（どこ）でもあアトおそりまぜ（こまれ）料理茶屋（やかり）。おや〳〵（さやう）手もとより気（きざし）

うち。二階（にかい）からの見（み）わたしの。表（おもて）ざしきの手（て）すりの側（そば）。二人まへ

むかし[illegible]く。酒肴を持出させ。座敷もさえくたびれし。[illegible]

ろくをで[illegible]は。そのうちのこたのしみける。お吉ハ手拭によりて[illegible]く

[illegible]完爾として。手を[illegible]とりかゝり 吉「アイくおまへ

さへくおまへ[illegible]。米「おまへさへ〳〵ト[illegible]アイト料理やの

二階へはいるおまへが[illegible]。[illegible]包を手にさげて。[illegible]の

男く[illegible]ところにて。[illegible]をさげ[illegible]倚よおもへば二足三足さぶりて

[illegible]つかむ。[illegible]一ッ[illegible]くさんまんでござりません 米「何でもまぁ見

ござりまし。[illegible]来るぞ。[illegible] 吉「それでも 吉「一寸サいつとものに

粋人風將（ずんき）徳「男をむもの遠慮（ゑんりよ）ハ粋人。ふく娘（むすめ）さんのそばへ先（さき）な
甘え　徳「ハイそれ其御免（ごめん）なさいト　お前（まへ）が側（そば）へ座（ざ）しければ狼狽（へどまぐ）く
ほくつきく　張「ムヽ來（き）どいハ女（おんな）兒（ご）ぞ。そうして年（とし）より大柄（おほがら）ぶの
吉「さやうサ十六とハ見へませんね　張「あれハ御亭（おやぢ）どんが病氣（びやうき）で
ござりますぞの　吉「モウ久（ひさ）しい病氣（びやうき）れ。それでお母（かゝ）さんの
るし。一ウ十ますび年（とし）もいかぬで。みをこの兒（こ）が手（て）ひとつかせぎ
そうぢやアびんごへすせん子　法「いやさ世（よ）ハ薄命（ふしあはせ）な人（ひと）がらく
らもおこめぐのきぶしまやこのお娘（むすめ）さんざアどうでも手前（てまへ）が

のみ世間(せけん)でござ。常(つね)に来るのは見えそうなものサ　喜へアイサ　それを
いろできるせずまんけれど。年がよりの旅人のぶざまさ。今で行末盛(さかり)で
なりますまいヨ。そして男一徳ども中ゝぶかしいのが美人多く　徳へ
ら、そのうちが器量能く。コウ美女(おねいさん)女の顔ぞ絵る。ソレから若い門く
中んるゝ手て気(き)のきゝた旅人　喜へ見る旅人騒(さわ)しかりして。あせつてる
こゝらのへんちんるまう所からぶちう。サア　おまえ達まるヨ。きつとかくせさる
さんる　徳へとかく美女(おむすめ)女。おかみさんぞいろく若衆(くろう)さらうこそサア
もゝ旅人の内(うち)へ通(とほ)門く。案内(あんない)されて旅人ぞ案(あん)くだされ。ヤレく　所(ところ)

愛そうにト南鐐二ツをまき紙へ包んで出しそうに潤済お
かれもその一物おそろしそうに入る法のごとくヘイハイおかげさま
ござります。若い後家さへアノお寺へいつでもおかねのごとく
坊ぞお腹の立ちますほど。お若い衆のくせにお前へ一
まてくまとりよのナシくそれは銭金ヨ。見たがお角そう
お若い衆わ人全体その身持は慈悲がくて。お前へ御やア限り
ない。難義なものゝ情けもなく。むまるおかまいなく。ひなく
あんまり情ぶかのお寺といふのは。おかしもんじやアるのでくそれは

いゝぶんるトいはれまして流石（さすが）詮索（せんさく）あつく。心（こゝろ）あてもなき頭（とう）

お客（きやく）へわるく礼（れい）をいふ。御存（ごぞん）じのとほり無（ぶ）調 徳「あゝんのおかたく

不調でかり。サア お盃（さかづき）おあげなされ酒（さけ）吉「ハイ あまり上酒（じやうざけ）の大（だい）の

きらひさ 徳「そんなら飯（めし）でも 吉「ナニ モウ おかまひなさんな

そんならノウ お客（きやく）さん。お前（まへ）さんが待（まつ）てるだらう。サアく 勝手（かつて）

まおかへりヨ トいはれてお客（きやく）は鏡台（きやうだい）と。いふ名を告（つげ）ぐ懐（ふところ）より

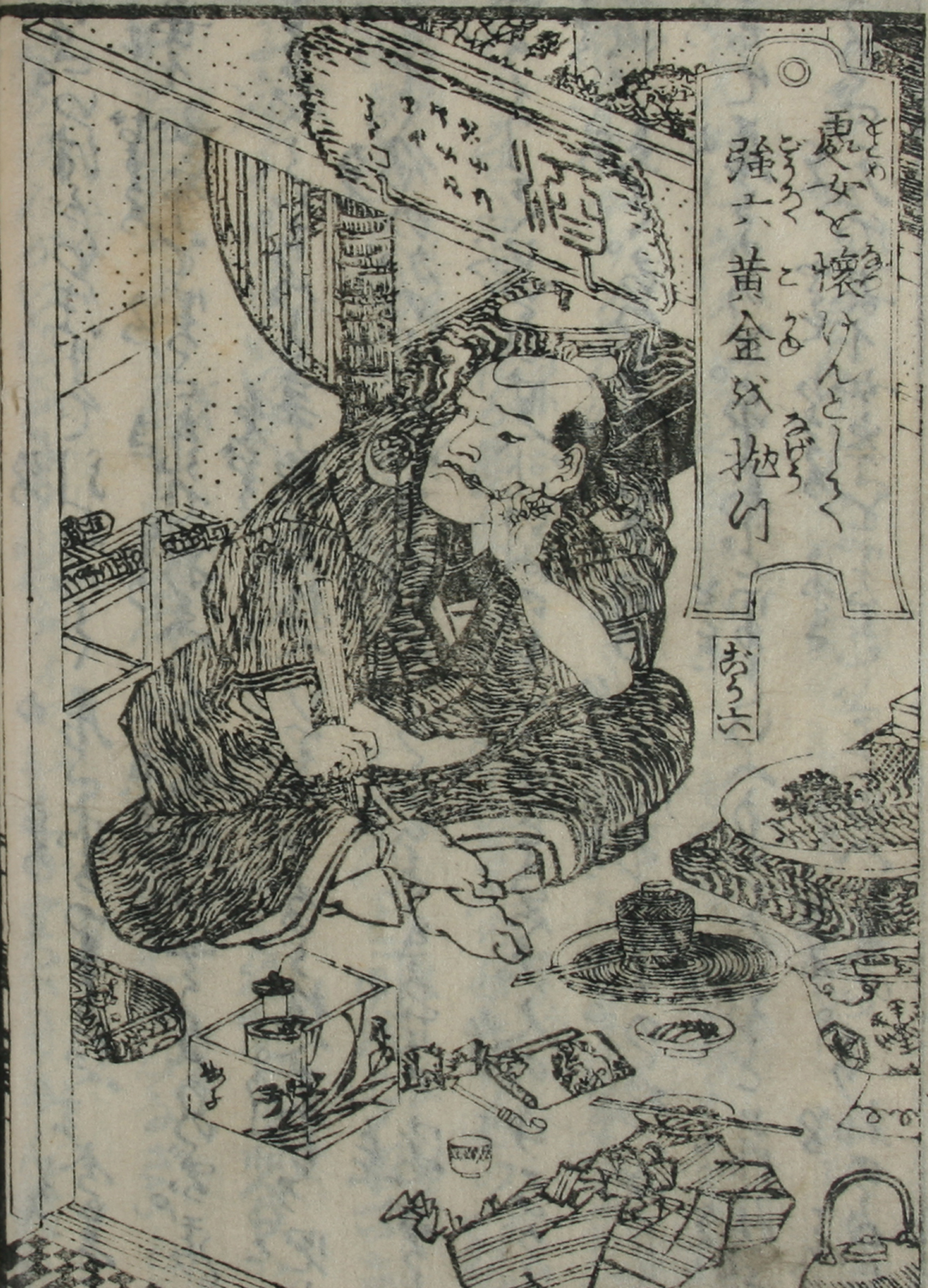
お金（きん）も五（ご）らく勝手の縁（えん）。よびとめて給（きふ）まをとらけ。耳（みゝ）に

よせ小声（こゞゑ）になり 吉「おまへさまかそれ見物銭（ぜん）をするると。言やも

めへのハアノお客(きやく)ヨ。どうぞちよつとしてもアノ位(くらゐ)なぬ。一ハ絶(ぜつ)え旦那(だん)おまでご。をこんなけへあんまり怖(こわ)らしくても。ほんと優(やさ)しい情(なさけ)のある人(ひと)。アノ客(きやく)の世話(せわ)するまで隙(ひま)に二朱(にしゆ)ハやらうとおつしやる。アノ客みゐさまで小六(ころく)さんより。違(ちが)ひましおやアなゐ人ちめへさへうんと云(い)やア。今日(けふ)ハも迎(むか)によこしなましたをさあなかす。どうぞお客(きやく)さん。まそまでハあつちがよかねへ。そずよくおめへもアノ人(ひと)を大事にするヨ。兎(と)のかまふゑゑあるあのゝそのうへにアきて実なる。小六(ころく)さんハモウ此(こ)がゝりずせ。もまし一銭やしい截煙(ぶり)の法(わう)のと

是ハおんのゑりごゑにもたれて。吉(きち)兵衛ハ胸(むな)ぐらし〽是(これ)ハ小六(ころく)さんが心がりつとらく。おまへさんまことにえらいの紙(し)もらく。人(ひと)まきれをありませぬと思つて。吉〽ナニヤ此男(をとこ)ハなんぞおまへさまの気(き)をありませぬはいな。綿(わた)が面白(おもしろ)くつてサ。小六(ころく)さんのおふくろとつれの親(おや)の昨日(きのふ)も天満町(てんまちやう)の奥(おく)住(すま)ゐ。ちよつと聞(き)えて小六(ころく)さんよ逢(あは)ずく。さのおのざんひさつくおまへさまを見(み)てアノ男(をとこ)の苦労(くらう)ならしく居(ゐ)ますもの。ちつとくりあはせてお出(いで)なさいと云(いふ)ところ。人(ひと)がいふほどあるわけぢやア。イヤおまへの実(じつ)ハこゝろざし結(ゆひ)わく

のご。いはゞ世はまでひろく寝て他のつまを抱く。言今日まではハ
安イ女郎を買て気をもむより。しれ端銭にならぬものぞ。手悉く
そのまへハ。ちよつと寝抱ずけちやアならねへ。素人の児が
来て。係のかのといふやうに。おめへよく言てきかせて遠ざける
せうして居る甚トいふものを嫌ひませぬ。人の女房ずべく
後が恐しく。気がちらずゆへ他の人よりわるい男の抱てやるな
言て居るものを。惚れど男といふものハ。金さへ落しやすむ
ものぞ。夫で安イ女郎を買ことばかりぞといふ一言で。専外のことの数


處女を懐けんとして
強六黄金を拋り
おろ六
酒

落丁

落丁

浮（うく）ことがあるものゝせかく画紙（ゑ）摸（まね）るやうに思ふ人（ひと）気（き）が
喜びの。天間町（てんまちやう）のてん甘人ありさんでうらふ。おもしろ恥（はぢ）でも
かくしてせんなき人。ならでせん人余（おん）まりのるのに悔（くや）しいやうなト
あ浮（さまざま）気（とし）障（ま）の怜悧（れいりてんとう）。おもへばよめやと思へども。憂（う）かれど
たえて逢（あふ）るの。音（おと）づれしもいかくに聴（きく）る折のこゝろ
ましば。花（り）田をうつと女児気（むすめぎ）よかる。しさ浅くさ身（み）にあまり
余所紙（よそ）ちがふゝあのびよの（ね）。浮（うき）よりあさましき出（で）ばなれ。よく
ふ白（ゑ）をあげ「ゑ（まる）うらやましい縁（えん）ある。お前（まへ）と寝てくれ（?）

手心も。騙(だま)さるゝこのが腹(ちつ)が立ちません。それはよふあの二度(ふたたび)三度(みたび)

小六(ころく)さんのお情(なさけ)で。父子(おやこ)が命(いのち)を繋(つなぎ)し御恩(ごおん)。そこへ今(いま)さら

縊(くび)られて。これぎりになるならべとそ。おみんせん人(ひと)なれど。未練(みれん)

とかせる気(き)はござりませんが。かの人が不びんに情(なさけ)るへト共に泣伏(なきふし)

もとに抱(だき)おこし（なへ）「これさく。そんなに涙(なみだ)ぞといてよいわ。それぞ

かゝるつらがいのふと紙筆(きん)く。又男子(むく)でござるお方(かた)の世話(せわ)になるん

なせへ。ヲウ事(こと)はゐるとでいつを捨(と)へから。どうぞお母(かゝ)さん是(それ)で申

まご不承知(ふしやうち)ながら。さしくおあへ目泣(なき)堪忍(ごかんにん)のごフウ ト騙(だま)しける

為門が紀は縄で。おゝんるゝ一途にかゝりきの。勝に木まうく同気相求むく。潤よくあるる狗の母を。勝手ゑらく　かくつまゆく路かんおくるく　かゝえ縄ぐるく。パテ　と目てまぜるい種を紙。鉄鎚でつくもむざんし。ナニいのちのことア　罪人の敵天まよ。あゝげつツて一つ四対りの。まあるあるるが　ゑ字をまいし。あなたくと様りるず紀元の座人さちかくり。かの強いをゐどよく　此しませてを処をり書状て。一両と余人つゞれけり

第十六回　恩愛の自殺

かくてお吉は浮も。家よかへりくきあぐとあら思案がまへ
まぜれど。世へ胡蝶の花の露。きてゐれめとのえがえよ。小六が
ゆるせし縁く。お吉が頼る主見とぞ。おめのめのとなる
まゆ。何の仔細のなからんぞやっといへのめのとはせしひきことや
かくいへど小六が身に。さうあらば大事いふしく。約のおもむき
告げんやと。あざむきたき沈吟のうち。又の兵法たをやぐと
執むるを儀律紙アより。ら里却しくるまぶ里皆は束縛ら
ある筆とりく。お吉が咄しの次第すまなりしかは根く哉ひかへ

卿ちゝ千々のなげき状をいだしく。かいさめて春納せしてあの
終（つひ）に言出さず情まん。ひそかにしきりてハ互の大事と文をかい
ても座くべし。住りホなく当惑（とうわく）し。手匣（てばこ）のうちに秘めおきて
その便宜（びんぎ）。まぎらかしゐる。その次（つぎ）の日ハ父（ちゝ）の兵衛（ひやうゑ）が。気分（きぶん）も
例（いつ）よりよしとゆゐを。床（とこ）の上（うへ）に起（おき）あがり。側（そば）にありあふ浄瑠璃
本（ぼん）取よせて慰（なぐさみ）に居たりしが。二重僥倖と見物がてらおとづれ
は母親かの文を懐（ふところ）にしのばせ。人（ひと）を殺（ころ）さんと企も
そらにことばのづる。引ちがへて入来（いりく）るお吉（きち）母あさき由縁のことに

いまでは族縁(だいづな)の菊葉(きくぶれ)がけ。天窓(あたま)ぐるりと結(むす)び髪(ぐ)。下総(げさ)の

嬶(かゝ)さんわるくいふ。女房(にようぼう)が門(かど)に立(た)つて居(ゐ)る。吉「イヤト 御亭(ご)るさんへ。アノ

お店(たな)さんの宅(うち)はこゝでござりますかと問(とへ)ば女房(にようぼう)は不審(ふしん)さうに

女「ハイ お店(たな)とはこちらの女児(むすめ)。何ぞ御用(ごよう)でござりますか。今(いま)

ちよつと出(で)ましたが。吉「ヲヤ お留守(るす)かへ。ハア 嬶さんがアノ児(こ)のお

爺(とゝ)さん久(ひさ)しく御病気(ごびやうき)と聞(きい)てましたが。それでもちつとは

お快(こゝろ)よいトいつてゐましたが女房(にようぼう)へ頼り案(あん)じ 女「ハイく 冥加(めうが)ら

ござりまして。今日(こんにち)などは余程(よ)快(こゝろよう)ござりません 吉「それはめで

しお待めせぞ。お師匠(ししやう)さんとの稽古(けいこ)すみ。お心(こゝろ)母(はゝ)もよくいらつしやりますか

まづ入(はい)らしやれ。町(まち)づ遣(づか)ひおまへさんがた。お和(わ)ひお母(はゝ)がよろしう申(まう)しました

それでも此(この)児(こ)のお世(せ)話(わ)しでござんよ。ようござります。御(ご)大(たい)層(そう)と存(ぞん)じま

しやう。岩川さまでもござりませんか。それ是(これ)から隠(いん)居(きよ)さまへ

も達よくありますから。お大事(だいじ)になさいまし。私(わたし)は豊後(ぶんご)節で琴(こと)

の師匠(ししやう)をいたしますが。和泉(いづみ)一と申(まう)ものゝ娘(むすめ)でござりますが

[illegible]よりんなみそでお師匠(ししやう)さんともおところがよくありません。恥(はづ)かしい

それで今日(けふ)もいろ〳〵お慰(なぐさ)みしまして、といふ事(こと)がありまして参(まゐ)りまし三

いづれおまへさんの御噂（うはさ）ばかりとおうはさしやまさ噂やアありやせねゑけ
どうぞ些（ちつと）もお心（こゝろ）よくでお咄（はなし）しがでませばよいがと。ゐくも案（あん）じ
ますふ。おめの御亭主（ごてい）までハ私（わたし）も大（おほ）かた嬉（うれ）しうございますにゑへ
ハアそれハ何（なん）とうぞんじませんが。豊島屋（としまや）からとゞくお咄ハテぞ。
生憎（あいにく）お袋（ふくろ）めが。大（おほ）かた今（いま）にかへりませうしばらく茶（ちや）でものんで
まし ト身（み）ハかまハねど年寄（としより）の。寄なしがお袋（ふくろ）ハやめく
喜「さモウおかまひハなされますな。ナニもモウそうそれも暦（の）ら
まりません。ちよつとお咄（はなし）しといりませう。外（ほか）の事（こと）でもございま

せんが。おかみさんが久(さ)ぐくのおやぢづらひで。内外(うちと)もお閙(こま)りあそばすとのこと。夫(それ)でアノお児(こ)も。のろく気(き)短(め)気(か)で居るさうな。側(ぞば)でさへお見か
ね申(も)可愛(うつくしい)さうだトかて今様(きんせい)流(ぐ)くの子ハ。ずいぶんも自堕(じだ)らくも孫人(まれ)な(ゑ)
つまませんの。亜(まま)でちやうどよいお嫁(よめ)しがございますんかくさへ
至このおハイぞんじませんが。御懇切(ごまんなう)なることかへつてかうござりますん
事ハ何かお有様(さまあひ)くみ次第(ともあ)で。女(むすめ)郎衆のくるひなぞでも若(わか)へ十七く おかみさん
人(ひと)の娘(むすめ)子(こ)さんなどにハあんまりぎつしりさ。私(こちら)がおもひ中(こころ)ハ千万無量(ちえ)
の出来合(でき)で。今(こ)ハぞんとわたし目出(ぞんざ)るでございますがアノ向こう衆

ミんなく。どふぞ月二三度（つきにさんど）くらゐで世話（せわ）をしてもらうとおもひますから。ねへ人おまへさへ。不躾（ぶしつけ）ながらまずごア見（と）ても蔵（まと）の雑女（まがと）。月二度（つきにふたたび）といふ是非（ぜひな）く。滅多（めつた）にやアありやせん先（さき）さまの風（ふう）のかはるまへうち。なんやくおとり機嫌（きげん）をとッて。ア見（と）んだりらアおまへさへも。お仕（し）きせ手（あのうへ）までまさを（まう）ようくべ。ごアやうさんアやう三度の無（む）縁（えん）もきらうといふもの。何（なん）といつても先（さき）が持まへさへ人の子（むすこ）ぶく。どうでもなりますアなト此（さい）で無精（ひきうけ）へ形（ふり）もくらふ〽ご道（らく）く、ぞんでもよふな。親（おや）の欲目（よくめ）からあらねども。まア人並（ひとなみ）

ま若菜。生娘を嫁にしてゐる。おしの金はまだまだたまらぬ

義時は人をよし見て痩世帯。明日はどうやら稼ぎてその日暮

の暮しかも。慎ましき身となる者。以前は金沢顕時と

北條家より賜一字拝領致したる者なれやおし。

の身より浪流の身となり果し其日より。一人飢ても渇

しても。二君に仕へぬ武士の意地をたてゝ。実にや天晴なるとこそ

人の義理ものふせのとれ。近頃無器用あれ悪縁の一念女ならず

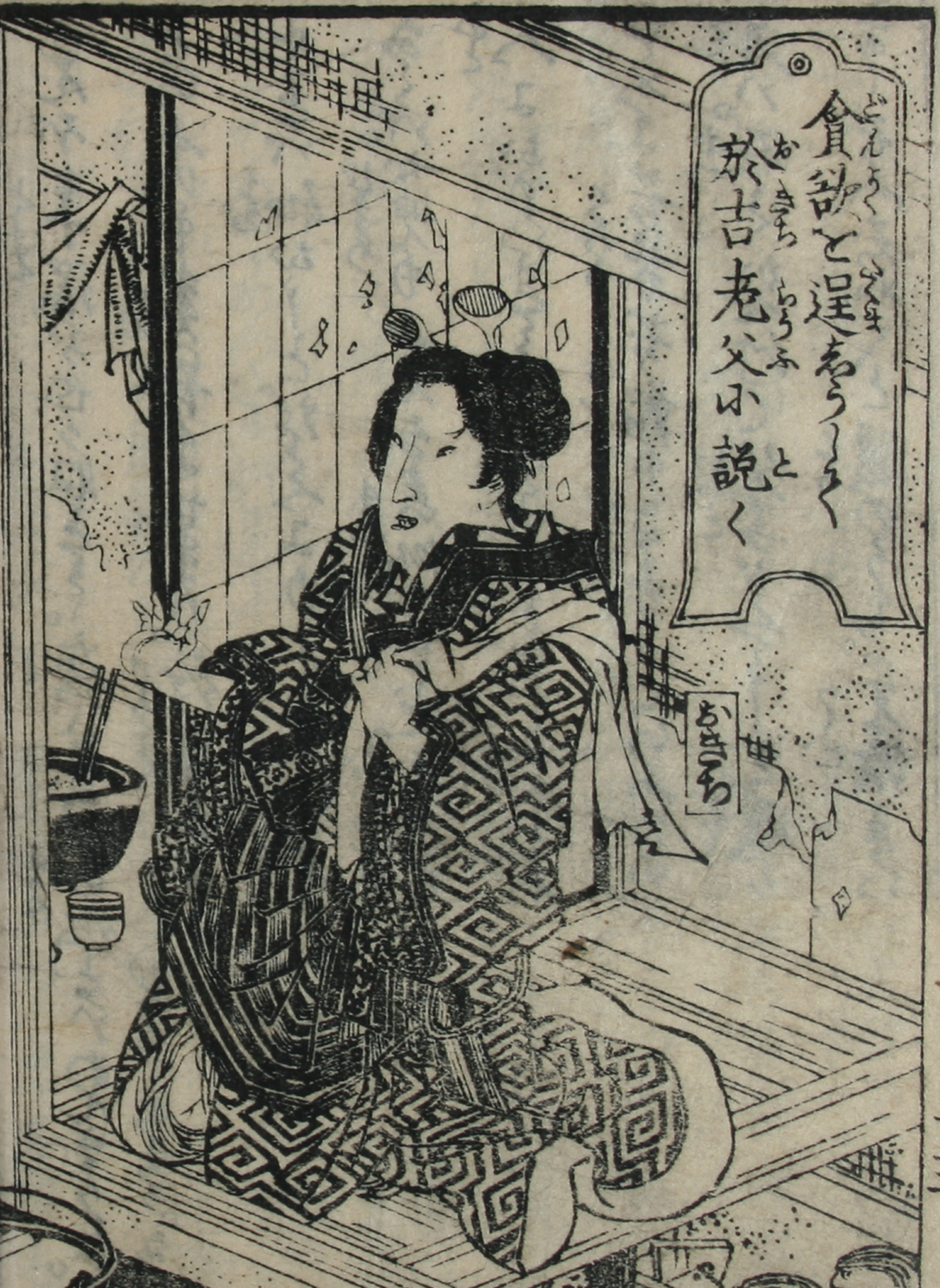
は某が。いふとてちやスとしてあまりと相手にあらね女性の事か。イヤモ

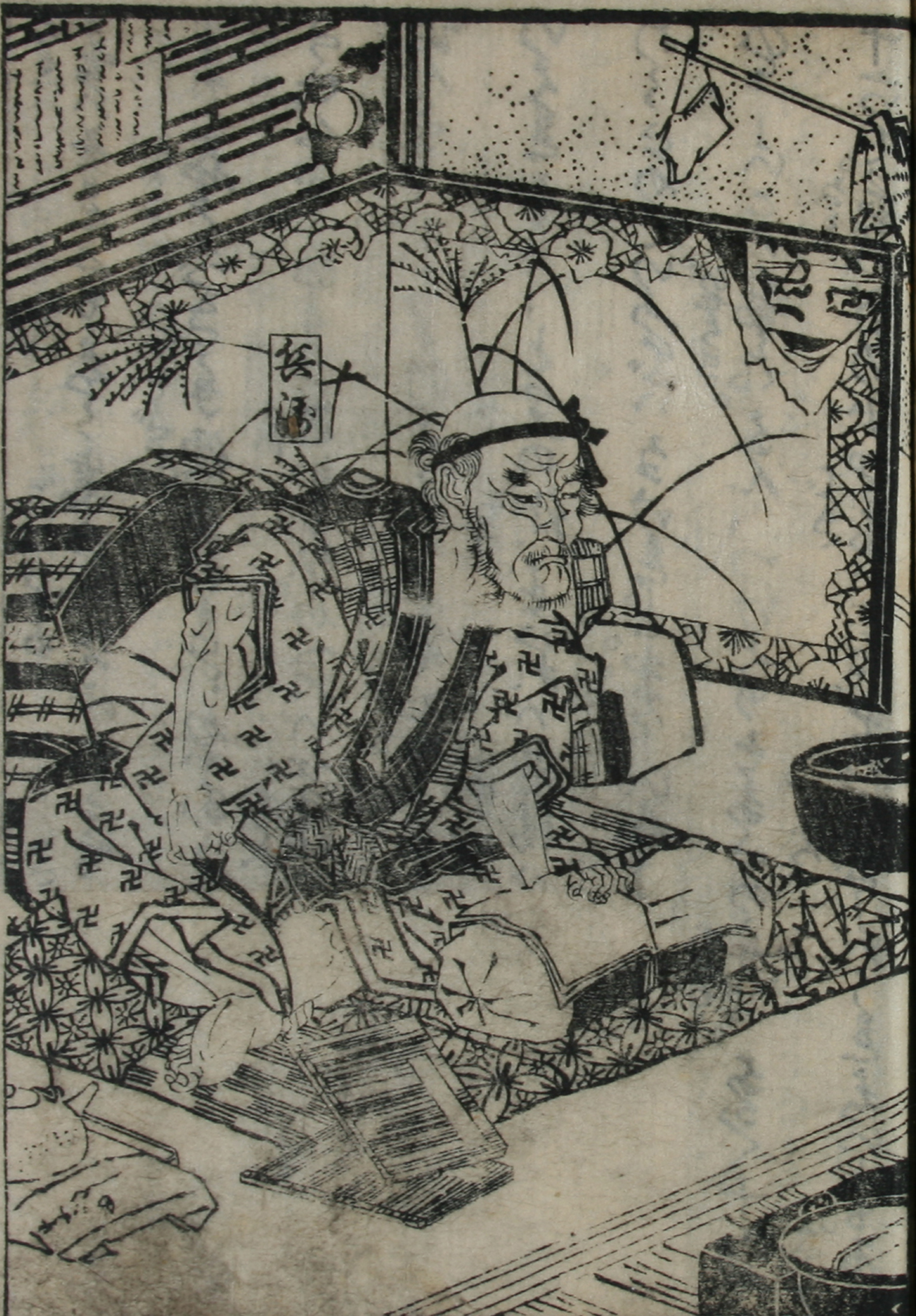
さすがの謀(はか)らひもつきぬ。心(こゝろみ)身ハめちまぜぬ。ぎりくしお娘のくる
さすが娘ート怒(いか)る商(おや)も帯(おそ)も且(かつ)老(おい)の一言(こと)。お手前(まへ)ハ読(よみ)て叙地(ぢ)ふ
うちわらひ吉「ぎやく紛(いそがし)き侍(さふらひ)ぞかし。女児(むすめ)ハ人(ひと)の戯談(あだぐさ)ものぞかし
そハ何(なに)が浮(うき)世(よ)る人。様(さま)さしおかしや。今(いま)くるが出来(でき)あいとって
悦(よろこ)ぶの喜(まゝ)似(に)すでし。女児(ちを)千万(まん)之母の胸中(どうちう)に圓(えん)る
れバ大進(だいしん)る出世(しゆつせ)かなへか。紙屋(かみや)の手代(てだい)よりあがりさまれて二条(ふし)ろ
一分(いちぶ)の瑞合(きずのもの)世界(せかい)く文字(おやこ)が命(いのち)紙縁(つな)ぐ。善縁(とわゑん)罪(と)のふ済(すみ)
ひも其(それ)で清(きよ)めての居(ゐ)にてでハあいくし。大(さい)をもつらしいる事(こと)をいひくる

さんな風くとはつけよ。笑止の毒千万ござる些(ちつと)もらくら
あゝ毎うわと世話(せわ)をきりや立流るは猿おめへの絵逐一
よ。おめへなきう素人ア着たる人が。夜寝るよ出く天窓(てんまど)の紙(かみ)
屋(や)の手代(てだい)の小穴とい小僧(こぞう)めの。鼠(ねずみ)よろつて覗(のぞき)て来たら
むかしとても。わらつて見物くとこさでア。悪口(わるくち)の亊も実(まこと)に扎まんと
女児(むすめ)ッ子がよろこぶ酒ア。今(いま)の目(め)のさえるよ見へるものぞうそ
あのゝ今(いま)のお若衆(わかしゆ)さんが。殊に器量(きりやう)そこなはせ人十二人(ひと)主ゑ顔(かほ)づく
ありいふ野郎どもおめへがよふぎいやアいひ様(やう)まづくいふと女も気むざ類(るい)

ふくらしまく路次の古佛殺しと罵らるゝ不調法ちらし。つ若黒へかくて
後家。何んぞくる兵衛が不精さへも身代半分を甘めるく
ちの事まかくしらくおまちめず。さのしい伽話おとろへ此やどひとの
しれ病ひのうちも。常に親太郎が世話してくれる。その日くの
小づかひどころで。僅の賃仕事で。そのといひおかゞ。全く
見ごろでおおかれる。何事不由せよ女児が勉学。思ひ申されて
との親父が、役にたゝぬの気の毒せんばんさりながらアノ
女子は昔の武士の意気地を出し。器量ならなくらが面目くるへ

なんぼ年増(としま)がかうねよこし。夜(よ)るの春情(はる)といふものはまりるぞ。これ
といふのも貧苦(ひんく)にせまり。奉公(ほうこう)する其の女児(むすめ)が心労(しんろう)。あかつき長寿
まゝべ先(まづ)おかしとだくよめまゐね此の身(み)の家業(かげふ)。跡(あと)づゝ身(み)をうり
あくびゝ。女児(むすめ)もそんな春(ま)似(ね)もせぬぞ。おとゝおもてこ十人並にも猜(こゝろ)も標致(きりやう)。よい
人(ひと)はおのれ達てく。楽(らく)をしてくらしたくまくある。奉公(ほうこう)人の身(み)がある
中なるよば。苦労(くろう)苦艱(くげん)もさまざまといふもの。生甲斐(いきがひ)の事老(おい)の
身(み)は。在(あり)くかく門て父子(おやこ)がくるしみ。腸(ちやう)をちさゞいて死(し)んぞ
まし。ぞうよざやくと腹(はら)のうち。覚悟(かくご)きはむるねこそやまし。おか


貪欲と逞しく
於吉老父に説く
おきち


長海

或(ある)ハそれ上手善悪(ん)の女児(むすめ)。ところ小六が方への文さへも出だせる

まで届(とゞ)くべき。手立(てだて)なければかやかくよこ申しけるも程の

ことぐハ、ひとり娘(あま)なりし。かくれバ兵衛(ひやうゑ)ハ莞爾(につこり)と「今(いま)おそる

鳴(え)くぞ。てゝ。てゝ。ちよ川とあゝへ来(き)や。おねーふちよろと笑(ゑ)ひエボト

いまさらくハイと父(とゝ)の側(そば)。をはなれバ兵衛(ひやうゑ)ハ袖(こゑ)をひきとめ「今(いま)

わけあつていふぞバまけまでど。先(まづ)しばらくしのその中(なか)よりおれが

ひさしいこの病気(びやうき)。なんにつけてもそなたの手(て)一ツ。なるべく十五や

十六ぞ。恋(こひ)のものに出来(でき)ハせぬ。その心(こゝろ)ざしよりまたハ孝(かうげ)

あつとも今(いま)までは親(おや)の恩(おん)深くさとしまね。そふきくとのわからぬ業欲(ごうよく)の

世(よ)の中へ生れたるもの。所(ところ)ごそも生(うま)れても身(み)だも親(おや)がいまへけりや。苦労(くらう)

まくらら我がさてまるらいのふ。そまして付(つい)てもこの見世(みせ)来るもさ去(さ)

ゝゝ小(こ)づらにくまぞ。そふさこのたんさ拘(かゝ)ひとろ。わつ安(やす)も無(な)もこの親父(おやぢ)

まへきらはねぎゝ。ふしぎく運(うん)のつきで思(おも)ひ醜あるのわるやきね下へいふ

めのく瑞念(ずいねん)が因(いん)果(くわ)の生来(でき)るものぢやあるし。茶(ちや)も大屋(おほや)がうけ

あふてしまへ。先(いくら)顔(かほ)も使(つか)ひまでごさ。座敷(ざしき)ちらねそのうへ、ふつうの

宮の出叔(おば)母ちやへ。親(おや)まて茶まで諸会(あひ)まする大屋(おほや)が座ちか

もうはいと先刻太郎どのが宅の前を通りかゝれば泣声

れ近いのかと大屋どのが。イヤ／＼それは了ら遠いらいぞ。隣家中

月末で女児所の色々請宣。とる年も志ばらには会く実さ

わざ人もあつといふ。甚敷の聞にまけ上て。催促されるゆへ

きのどく。実にこまる不都合じゃ。ハウ御座者ども口惜しく。そして手まへは

金銭の工面出来るゆへ。年とって男の手でさへならぬは金ぞ。よもやおれ

手まへ金子がなるかね。まさか盗みもさせまいし。金のてる女が智が

なは親子の中で一家にかゝりもかくして居ることのならへ隣子姓し

て笑（きう）してゐる下閻魔（えんま）くハツと口隠（くちどめ）る。が是ハ我の流（ながれ）の奥（おく）あめぢある

て雲時同念もるがりしるべつ征伐（いやすゑ）ハさまもく小判紙（こばん）まてめ云（いへ）

コレサおそろしきの事（こと）ハ。隠（かく）しても知（し）るる者ハヤイ。畢竟（ひつきやう）貧人おもとぶ病気（びやうき）

内気。何（なに）もかも笑（きう）せまいと。手（て）まへひとりで討（うつ）らふ了簡（れうけん）おかまひや

丸（まる）ではとんとおかねがつぶしく了簡（くゑん）をさるとよ。家（け）ぢまうれハ

それまでよし。気任世然（あま）然いふねのさ。気任世殺（むさう）をせぬのだ。八丁さく

こまへ駒（こま）でゐの。コリヤ丸去（まる）おかねしたテ。紙屋（かみや）の手代（てだい）の小六（ころく）といふ

心（こころ）へあのの状ゑしつく最（わ）タアト思（おも）ひもよらぬ問（とひ）言（ごと）難題（なんだい）へ注意もく

行として。さらふ図谷の云句も出まさ。さし備くを貶寶ハ可なし
知ゞ。勝雨の人ゝハ嘆しきんなくが氣しハてすな福来ねゝ。
身をすげなくもこの親父を。絵くまうしといふ孝心らしき図し。
ころすで小六よ召し貢でもあらふといふ嘘。昔平家の丸
とや死人ぞでもう一門滅び。世をさる使の者ハ内ゝ辻君と
這ことよ。ことゝも古のまんされく風情ぞんざい素顔で仕舞う
とてもさまてふ祝るゝとも古ハザア　とさドやそのうけ代くハあらう
をまして修せしハト再三同の問言にも毎る由今ハ包みが茶料

蘭学(らんがく)とそ[illegible]ども。和蘭(をらんだ)通詞(つうじ)のたぐひときこえしと[illegible]が
朝夕(あさゆふ)の。便(たより)[illegible]由(よし)あらんなどと。望(のぞ)むところ小(こ)[illegible]あひぞこれより
後(のち)は如此(かくのごとく)[illegible]と。なづけしも中[illegible]絶(たえ)[illegible]しる。を
まで幾(いく)[illegible]ものがたり。それより後(のち)の小六(ころく)が[illegible]して。[illegible]
繁昌(はんじやう)しけるぞ。今日(けふ)までくらし[illegible]一服一対(いつぷくいつつい)がてらど[illegible]
宮(みや)まゐり出(いづ)る[illegible]ようけんといふもとあざ[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]。[illegible]
うち[illegible]まて。[illegible]切(きり)[illegible]のとまり[illegible]

忽然ふらちな思をもつて一生をよき[illegible]安穏にして年にくれける。わが[illegible]羽立教訓と[illegible]天道の。お計ひでござりやう。おまへ[illegible]をも忘れぬ身の上。偏も世にある人とおもふて。今ハ又小言せご年にしまく。他の名をかゝるぞや[illegible]目。おねしが日頃も世とく得心合点するとのみ。[illegible]お君[illegible]のみ[illegible]どうやら心の[illegible]あかくのこぞ[illegible]甘まいぞや ト 笑ておもへまもく[illegible]えゝへござりますまい。お君さんと[illegible]先刻おねしが留守の間になんぼ[illegible]で来てござりて[illegible]の小言がいうても。アヽ女子ゐ

〳〵愛(あい)きやう笑(わら)ひ子孫(しそん)繁(はん)昌(じやう)の因(ゐん)縁(ゑん)かねしに世話(せわ)しくやかう
こゝろ色(いろ)ぶ(ふ)むつ(つ)めでたし一言(ひとこと)に。和(わ)合(がふ)あらそう(う)腹(はら)立(たち)をさへ[illegible]と
しらく(く)假(え)川(かは)にぶ。それや此(この)人(ひと)の其(その)家(いへ)をふ。たづねきたりのみ由(よし)と世(せ)けんが
かはりて継(まゝ)親(おや)に編(あみ)ぶ(ぶ)まじりはゞトいよ〳〵悲(かな)しみの可(か)愛(あい)さ可愛がり
膝(ひざ)のあそびへいつとな色(いろ)く。ありがたし涙(なみだ)のひとあくるとも其(その)一(いち)起(おき)居(ゐ)ふ(ふ)て
とあらせ。何(なに)ろかゝると御(ご)門(もん)跡(せき)。其(その)都(と)ゝく料(れう)を様(さま)けへの御(ご)前(ぜん)ぶ
まゐりて花(はな)のけしぶ。おもひつくまゝ寝(ね)ハ小(こ)ぶぢぶ取(とり)あげ一(ひと)子(こ)ぶをまもる
らぎおゝしくすのどまへかへりみをれぬ名(な)ある帆(ほ)の晴(はれ)。然(しか)る時(とき)ハ

頭紙うちのそげ　きく「コリヤ猿太夫殿ござる。今ハちよつと手間
町へ往てナ。その小六紙のまへて来たまへ。おねハ小紫がつまでき智
今宵ハめでたく今までの礼もいふたり殿の事をも。頼んでおかう
さうでもある。時分がらで閙がしくても。ちよつとさてまで縁来
ゆりこトいはれて額のそげでも。むかふが調子能くひよりと
紐ぶかりえて居ますの。呼よ往きとて来た日まし。パラリござるト
後ぢやさうな。アイと返答もあつたさうで。のぢやくまゝ紙質屋ハ泉ぢやう
きく「ほんのゆ紙そのよふかいぢやくほんざんへ。世間ぢや燈紙点まじや

気へり。手(て)ずからしせずばおそくなる。年(とし)が寄(より)てはせわしなく

一刻(いつこく)は千金の逢(あひ)ひしよりもはかなく千金の継(い)ぎも来(き)もと

せり立(そ)られて女児(むすめ)義(ぎ)の。山(とう)たの院(えん)恋もさびしまり秋(あき)ぐに

物(もの)のあはれを解(くご)けると。世(よ)の諺(ことわざ)にもいふなれど。ごく上人

ことの思(おもひ)にはまじひ。意(ちがた)にも影(える)しげくみえしと。おもひあへしく

ことわざの有(ある)へ「それは往(い)にしへの世までがつゞ約束(やくそく)

をあげくるゝ去へ行やく飯(めし)を食(くひ)てゐるは。それよりもあとへト

せわしなる親父(おやぢ)もところどころ親と常(おび)に意見(もと)し。かへ(て)すり

さげる桃灯の紋も護符で剱擬革。文を添へあるを

の苦痛と。いふほどこそ有名詮自性。扨も昔を忍ひ

てや。其まゝ首途の父の命、也二ツ中身ひとへ孝儀を

かしこく立出る。とはまた親子の日こそと名残をしまず かの心

あたしける

花の志満臺巻之三終

口演

一　本役者八日朝十日暮之一通りよりお出し[illegible]

一　まさかし[illegible]一切出し申さ候

一　[illegible]子遊様のまかなひ銭ハたゞ下さるべし

こうら鼠之ひ[illegible]こくなく大きん出来

はらく割役挨拶市之みくば

一　壹冊ニも[illegible]之[illegible]絵[illegible]笑完不取わく

みな割りんつくく[illegible]を[illegible]

松茸六[illegible]　[illegible]